

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520782

研究課題名(和文) 短期大学における多読を土台にした二年間の総合的英語力向上プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of English Education Program through Extensive Reading Methods and Materials for Two Years in Junior College

研究代表者

竹森 徹士 (TAKEMORI, Tetsushi)

宮城教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90282087

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：短期大学において、多読教育を実践してその効果を検証し、多読教育を土台にした二年間の英語向上プログラムの構築を試みた。本研究に至るまでに取り組んできた多読教育の成果をふまえ、多読教育環境の整備、既存の英語教育科目との連携を図りながらの多読教育科目の創設、TOEICおよびアンケートによる学生の英語力の伸び、多読の教育効果の測定を行ない、その効果を確認した。また、多読教材活用の一環として、公開講座において多読教材を用いた活動を行なった。

研究成果の概要(英文)：In this project we tried to develop English education program through extensive reading (ER) methods and materials for two years in Junior College. Based on the findings through activities of ER we carried out so far, we increased the books for ER and organized them to improve convenience, and started new ER classes encouraging collaboration with other existing English classes, and confirmed their effects through the analysis of the students' TOEIC scores and their responses to the questionnaire conducted in each class. To promote the use of ER materials, we also tried to use them in the extension course in Junior College and found their effect.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学 外国語教育

キーワード：英語教育一般 多読

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 多読によるリーディング力養成

研究代表者および分担者が調査を実施した島根県立大学短期大学部(以下、短期大学とのみ記す)の総合文化学科には英語英米文化を学ぶコースがあり、主として英語力養成と英米文化の理解を柱に教育を行っている。近年学生の英語力格差が広がっており、英語教育に求められる内容も多様化が進んでいる。自分のレベル、関心に合わない教材が用いられた場合、英語の学習が苦痛になり、苦手意識が植えつけられてしまうことがある。いかに学生の関心に対応しつつ、効果的な英語教育を行うかは喫緊の課題である。

学生の英語力の点でとりわけ問題となっているのはリーディング力の養成である。短期大学で年に2回実施しているTOEICの結果によれば、総合得点としては伸びているが、リーディングセクションの得点が伸び悩んでいる。また、2007年度の大規模なカリキュラム改編では従来の英米文学系のリーディング科目が減った。

### (2) これまでの多読教育研究と活動

リーディング指導の一環として、グレイディッド・リーダーズ等のきわめて平易な教材から読書を始め、それぞれの学生の能力と関心に応じて読書を進められる多読指導の研究を進めた。

2009年度、2010年度は学内の学術教育研究特別助成金をもとに研究を行なった。課外活動や授業の一部で試験的に多読教育を実施し、一連の活動の成果と課題を紀要に発表した。

多読教育の利点は多量のインプットという目的のみならず、きわめてやさしい図書から読書を始めるため、様々なレベルの学生に対応できるという利点がある。また、学習者の自立性を重視し、学生の自主性が発揮され、持続的な学習習慣を身につける機会としても期待される。

### (3) 短期大学における課題と本研究の方向

短期大学の教育の課題は、2年間という比較的短い修学期間で効果的な教育を行なわなければならないことである。多読に関しては「100万語多読」という謳い文句は魅力的だが、「100万語」という言葉を掲げて学生に読書指導をすることは現実的ではない。短期大学という教育機関と対象となる短期大学生の状況に合わせた多読教育が必要である。

また、本研究においては、勤務校での蓄積を生かし、既存の英語関連科目との連携を図ることが教育面において適切である。このような条件のなかで多読教育の長所をふまえ、多読教育を土台にした英語教育のあり方を考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の課題は、短期大学において、どのようにして、あるいはどの程度、多読を柱に据えた二年間の英語力向上プログラムを構築、実践することができるのか、その可能性と効果を探ることである。

## 3. 研究の方法

### (1) 対象

前項で述べたように、本研究は2009年度より研究代表者および分担者が短期大学で行なってきた多読活動が基礎となっている。本研究においても、短期大学を現場に活動を進めた。

対象となる学生は短期大学の総合文化学科(定員140名)の英語文化系に所属する学生(1、2年それぞれ30名程度)が主であるが、授業によっては総合文化学科を構成する他の系(日本語文化系、文化資源学系)に所属する学生も履修している場合があるため、それらの学生も対象に含まれる。

### (2) 内容

研究活動は大きく以下を主とし、すべての活動に、本研究構成員が関与し、随時全員による協議のもとに研究が進められた。

多読ライブラリーの整備、所蔵図書データベースの構築

多読用図書としてグレイディッド・リーダーズやレベルド・リーダーズが一般的であるが、過去の活動と今後の授業展開を考慮して、図書の収集、整理を計画的に行うことにした。また、学生の利用の便をはかるため、短期大学所蔵多読図書のデータベースを作成する。

授業カリキュラムへの多読科目導入

これまで課外活動や授業の一部で行なってきた多読教育から得られたデータ(学生の読書量、TOEIC、クローズテストで測定した英語力の伸び、アンケート結果など)の分析をもとに、多読を中心とした授業を検討する。

授業カリキュラムに多読授業を導入し、データを収集、分析し、授業内容の検討、考察、修正の作業を行ない、短期大学に多読教育を定着させる。

多読教材の活用

多読教育の浸透を主な目的として、多読教材を様々な方法で活用することを試みる。例えば、公開講座など、学外に向けた短期大学の地域連携講座で多読教材を活用して英語教育を行なうこと、などである。

## 4. 研究成果

### (1) 多読教育環境の整備(ライブラリーなど)

学生の読書状況、および授業での活用をもとに検討を重ね、多読環境を整えた。

総計約1500タイトルの多読ライブラリー

を完成させた。好評だったシリーズや最も利用頻度の高いグレイディッド・リーダーズの低いレベルの図書は複数のセットを揃えた。

図書館の協力を得て、多読図書コーナーを図書館に設け（写真 1 を参照）、それぞれの図書には語数、レベルを記したシールを貼った。

また、教室近くの資料室にも図書を配置、CALL 教室 PC には朗読ファイルを備えた。また、本学所蔵多読図書のリストをデータベースとしてエクセルで作成し学生に配布した。

また、多聴のための音声ファイル、図書館に備え付けのタブレット PC での読書のための電子書籍も揃えた。



（写真 1 図書館の多読コーナー）

## （2）多読科目の導入および他の授業との連携

### 多読科目の創設と英語力の伸び

2 年間にわたって多読教育を行なうため、そして授業内読書の時間を確保するために、多読を中心に据えた科目「多読演習 A（前期）」「多読演習 B」（後期）、「多聴英語」（後期）を一年生を対象に設けた。

「多読演習 A」「多読演習 B」では 90 分の授業の半分を多読の時間にした。教室を図書館のセミナー室にし、学生は多読コーナーから自由に本を選んで読むようにした（写真 2 を参照）。

残りの半分の時間では、多読図書を用いたストーリーテリング、自分が読んだ多読図書の紹介など、図書を読むだけでなく、図書を生かした活動を行なった。

これらの授業においても学生の読書量の把握と授業に関するアンケートを行なった。

「多読演習 A」の受講生の読書量平均が約 4.9 万語であった。また、「多読演習 B」「多聴英語」では 2 つの授業を合わせて読書量を測定し、平均は 8.9 万語だった。これらはほぼ、私たちがこれまでの研究から想定され得る範囲の数値であった。

また、これらの科目を全て受講した学生の

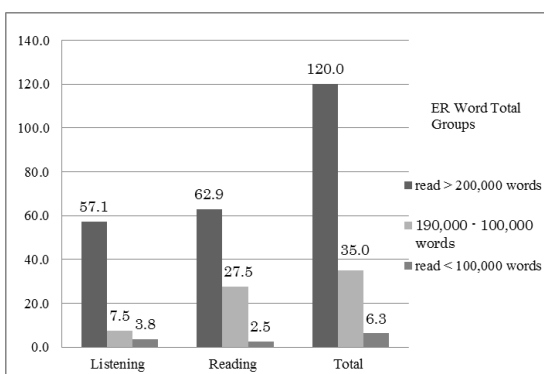
TOEIC テストの一年間の伸びを調査したところ、20 万語以上の読書量の学生のリーディングの伸び平均は 62.9 ポイント、10 万語台の読書量の学生の伸び平均は 27.5 ポイント、10 万語以下の読書量の学生の伸び平均は 2.5 ポイントであった。多読の読書量の結果の差が TOEIC のリーディングセクションの伸びの大きさの差に重なる結果となった（図 1 を参照）。

今後、これらの数字を参考に、学生への期待値、授業の目標や評価の目安を設定することが可能になった。

さらに、これまでの継続としてアンケートによる情報収集と分析を行なった。ライブラリーの工夫により、図書の充実度に対する評価は高かった。また、英語を読むのが速くなった、本を読むのが楽しくなった、という点に関する評価が高く、多読の長所を学生自身が意識できる教育になっていると思われる。



（写真 2 図書館を利用した多読授業）



（図 1 読書量別に示した学生の一年間の TOEIC の伸び）

### 他の授業との連携

本研究メンバーのうち二名が文学を専門とし、英米文学の授業を担当しているため、多読教材を文学授業のテキストに取り入れて授業を行なった。

文学作品の中には、優れた作品であるにも

かかわらず、外国語学習者にとっては難解なものがある。原文で読むことに意義があるという意見は確かだが、短期大学生が半期の授業で長編作品を原文で読むにはかなりの苦労が必要で、教育的には逆効果になる可能性がある。

授業では古典作品を選び、長編『白鯨』を扱い、また課題として『クリスマス・キャロル』を指定した。こうして、一冊の本、物語を読み切る喜び、達成感を知る機会を得られることも、多読教材の文学教育という観点から、長所となるところであった。

### (3) 多読教材の活用

短期大学の地域連携活動の一環で実施している公開講座で成人を対象に音読と読み聞かせ講座を開講した。

多読教育のために図書館に揃えた絵本やレベルド・リーダーズは読み聞かせにふさわしい教材でもあり、高い年齢層の方々にも大変好評であった。

短期大学には「おはなしレストラン」という読み聞かせの図書を集めた図書館があり、児童を集めて読み聞かせが行われている。講座では、そこに集まった子供たちを前に読み聞かせの実践も行なわれた(写真3参照)。



(写真3 児童に囲まれて絵本の読み聞かせをする講座参加者)

この試みは、地域の身近な研究、教育の拠点としての短期大学の地域貢献として、今年度も継続している。こうした地域貢献活動は多読教育のプログラムに直接に関わるものではないが、多読教育、多読教材の英語教育における多様な活用の可能性として、ひとつの参考になるものである。

大きな書店に洋書が並ぶ大都市とは異なり、地方の小都市では手に取って気軽に読める洋書があること自体、大きな教育効果がある。短期大学の学生にとっては言うまでもな

く、地域の人々にとっても、自力で読むことができる多読図書で学習する環境、機会に恵まれることは、英語学習のモチベーション維持にもつながる。

### (4) 今後の展望と課題

本研究の3年間とそれに先立つ2年間、短期大学で多読教育を継続してきた。

多読教育により英語のリーディング力の伸びに効果が見られることは確認できた。また、今回の調査では10万語、20万語という単位での学生の英語力の伸びについても確認することができた。また、読書量の分布についても、一定の予想が可能になった。

しかしながら、短期大学における調査ではまだまだデータが少なく、個人差がデータ結果を大きく左右するケースがある。今後、さらにデータ収集と分析を継続して行なう必要がある。

また、英語教育というものをさらに広い視野でとらえるならば、多読教育、多読教材の教育効果はより広がる。アンケートで示されたように、読書が楽しくなった、これからも続けていけそう、という、英語学習や読書に対する前向きな姿勢を醸成するという点において、多読教育の精神面での貢献度は高い。多読教育のこうした利点は、授業のみならず、公開講座においても顕著に認められた。また、多読を始めてから、初めて英語の本を読んで感動を味わったという学生がいた。短期大学の多読教育にとっては、数値では表せないこうした効果の大きさが明らかになった。

本研究では、短期大学における多読教育プログラムの構築を最終的な目標に据えている。多読科目を設けてからまだ2年が経過した段階であり、他の英語関連科目との連携を進めながら、引き続き、多読教育の実践と教育効果の検証を進めていく必要がある。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Tetsushi Takemori, Yoko Kodama, Kriss Lange, "How a Japanese College Added ER to Its English Curriculum," *The Journal of Extensive Reading in Foreign Languages*, 査読無, Vol. 1, No. 1, 2014, 1-13

竹森 徹士, 小玉 容子, ラング クリス, 「多読教育の発展的試み2」、『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』、査読有、第51号、2013、pp. 33-41

竹森 徹士, 小玉 容子, ラング クリス, 「多読教育の発展的試み」、『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』、査読有、第50号、2012、pp. 9-18

〔学会発表〕(計1件)

Tetsushi Takemori, Yoko Kodama, Kriss Lange, "How a Japanese College Added ER to Its English Curriculum," The Second World Congress in Extensive Reading, September 13, 2013, Yonsei University, Seoul, Korea

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹森 徹士 (TAKEMORI, Tetsushi)  
宮城教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：90282087

(2) 研究分担者

小玉 容子 (KODAMA, Yoko)  
島根県立大学短期大学部・総合文化学科・教授  
研究者番号：40195748

ラング クリス (LANGE, Kriss)  
島根県立大学短期大学部・総合文化学科・講師  
研究者番号：90533357